

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修 士 論 文 概 要 書

論 文 題 目

中国語母語話者による長母音習得プロセス
の実態

－ 語レベル・文レベルでの生成に着目して －

渡 邊 咲

2022年 9月

本研究は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、CS）が、7ヶ月間におよぶ調査期間において、どのように文レベルにおける長母音を習得していくのか、そのプロセスを明らかにした記述的研究である。さらに、その結果をもとに、文レベルにおける長母音生成についてどのような発音学習支援が可能であるか、示唆を与えた。以下、本論文の流れに沿い、概要を記述していく。

第1章 はじめに

第1章では、本研究の「目的」、「本研究の位置付け」、「問題意識」、「意義」、「本研究における用語の定義」、「リサーチクエスチョン」について述べた。

本研究の目的は「CSが7ヶ月間におよぶ調査期間において、どのように文レベルにおける長母音を習得していくのか、そのプロセスを明らかにする」と明記した。さらに、本研究は「記述的研究」に位置づけられ、特に授業や発音指導などの教育的介入を行わず、CSの習得プロセスを記述していった。

次に、なぜ本研究を行うに至ったのか、「問題意識」、「意義」を述べた。本研究を行うに至ったきっかけは、筆者が発音指導現場で以下のような学習者の特徴に気づいたことにある。その学習者の特徴とは、語レベルでは、「正しい」リズムで発音できているが、文レベルになると母音の挿入や欠落が目立ち、いわゆる「崩れた」リズムになってしまう学習者である。

多くの学習者は、初級という段階を経て、複雑なやりとりをする場合、語レベルを超えた大きなレベルでのリズム習得が必要となってくる。たとえば、教室という限られた空間では、文レベルにおけるリズムに対して厳密さは要求されないかもしれないが、学習者が社会という空間に出、「通訳者」、「ビジネスマン」として働く場合、そこでは、単音や語というレベルを超え、文、文章、談話におけるリズムの「自然さ」が求められるであろう。特に、談話レベルにおけるリズムの「自然さ」には、母音の長短が重要となるという（小熊 2008）。

より小さいレベルからより大きなレベルへと習得が進んでいくと仮定するのならば（戸田 2010）、文、文章、談話という大きなレベルでのリズム習得を明らかにする前に、まずは比較的調査が容易な文レベルにおける母音の長短の実態および習得プロセスを明らかにする必要があると考え、以下の2点の「リサーチクエスチョン」を設定した。

RQ1、語レベル・文レベルそれぞれの環境において、NSは2音節3モーラの長音拍における母音をどのように発音しているのか。

RQ2、語レベル・文レベルそれぞれの環境において、NSの発音を基準とした場合、CSは2音節3モーラの長音拍における母音をどのように習得していくのか。

なお、「本研究における用語の定義」では、「習得」という用語を使用する際は、以下の定義において使用すると明記した。「習得」とは、「CSの母音の時間制御がNSのそれに近づいている/近づいた状態」を指す。

第2章 先行研究

第2章では、本研究に関連する先行研究を述べた。

まず、言語における「リズム」とは何か先行研究を引用し、定義した。リズムを構成する要素にはさまざまなものが考えられるが、本研究では、Nooteboom (1997) に則り「長さ」に注目すると明記した。

次に、CSの母語である「中国語の音節構造」と、目標言語である「日本語の音節構造」に関する先行研究を引用し、違いについて述べた。「中国語の音節構造」と「日本語の音節構造」は異なり、音節構造の違いが長母音が習得困難である要因に関わると明記した。

さらに、「中間言語」に関する先行研究を引用し、CSの習得プロセスを把握する上でどのような点に着目すべきかを明記した。鮎澤 (1999) によれば、習得プロセスを把握するには、学習者の中間言語に着目すべきであるという。そして、その中間言語とは、以下の要因が絡み合いながら構成されるという。その要因とは、「母語からの転移」、「教授法からの影響」、「学習者の第2言語習得ストラテジー」、「第2言語でのコミュニケーション・ストラテジー」、「過剰般化」、「化石化」など (鮎澤 1999, p. 5) である。本研究においても、以上の要因に着目し、学習者の習得プロセスを観察していくと明記した。

さらに、「リズム習得に関わる個人要因」に関する先行研究を引用し、どのような個人要因が習得に関与しているのか、着目点を述べた。木下 (2010) では、リズム習得に関わる要因として、以下のものをあげている。内的要因：「学習開始年齢、動機づけ」、外的要因：「学習場所・方法」である。本研究でも、木下 (2010) に則り、学習者の「学習開始年齢、動機づけ、学習場所・方法」に着目し、習得プロセスを観察していくと明記した。

さらに、「日本語の長母音生成に関する習得研究」に関する先行研究をあげた。長母音の生成に関する縦断的な記述研究には、モンゴル語母語話者 (以下、MS) を対象とした研

究（土屋 1992）、英語母語話者（以下、ES）を対象とした研究（Toda 1997）がある。本研究では、土屋（1992）およびToda（1997）と同様に、NSの発音を基準とすると明記した。さらに、調査には、CSを対象とした。

最後に、「長母音位置の違いに着目した研究」に関する先行研究をあげ、なぜ本研究では調査語を2音節3モーラとするのか理由を2点述べた。1つ目の理由は、語頭の長母音は比較的習得しやすいからである（小熊 2001）。今回、7ヶ月間という限られた期間において調査を行う。習得変化を観察・記述していくために、比較的習得が早く、容易な調査語を選出した。2つ目の理由は、室井（1995）でも2音節語を対象としており、比較検討しやすいという理由より、本研究においても同様のものを用いた。

第3章 調査

第3章では、本研究で行われた調査1、2について述べた。

調査1の「目的」は、NS4名対象とし、以下の2つのデータを採取するために行うと明記した。「1、語レベルおよび文レベルの長音拍における母音の持続時間」、「2、語レベルおよび文レベルの長音拍における母音の持続時間の割合」である。さらに、「手順」、「協力者」、「調査語」、「調査文」、「分析方法」、「結果」について述べた。調査の結果、以下の2点が明らかになったと明記した。なお、V1とは長音拍における先行母音（つまり、長母音）、V2とは長音拍における後続母音（つまり、短母音）を指す。

- 1、NSの発音では、語レベル・文レベルいずれにおいても、V1がV2よりも長く発音されていた（ $V1 > V2$ ）
- 2、NSの発音では、語レベルにおいてV1はV2の約2倍強、文レベルにおいてV1は、V2の約2.5倍になっていた

調査2の「目的」は、CS1名対象とし、NSと同様の2つのデータに加え、「フェイスシート」、「フォローアップインタビュー」、「発音に関するアンケート」のデータを採取するために行われたと明記した。さらに、「手順」、「協力者」、「調査語」、「調査文」、「分析方法」、「第1回調査結果」、「第2回調査結果」、「第3回調査結果」について述べた。調査の結果、以下の点が明らかになったと明記した。

	第1回調査		第2回調査		第3回調査	
	持続時間	V2に対するV1の比率	持続時間	V2に対するV1の比率	持続時間	V2に対するV1の比率
語レベル	($V1 > V2$)	V2に対しV1が長すぎる（長母音eを除く）	($V1 > V2$)	全ての長母音がNSに近い数値（習得？）	($V1 > V2$)	長母音oを除く、全ての長母音がNSに近い数値（部分的習得）。
文レベル	長母音の短音化 ($V1 < V2$ or $V1 \approx V2$)	V2に対しV1が短すぎる（長母音oを除く）	($V1 > V2$)	V2に対しV1が短すぎるという現象は無くなった（長母音oを除く）。長母音oは、過剰に長く発音されている。	($V1 > V2$)	長母音e,oを除く、全ての長母音がNSに近い数値（部分的習得）。

第4章 分析

第4章では、RQ1およびRQ2の分析を行った。分析の結果、以下の9点が明らかになったと明記した。

- 1、語レベルと文レベルでは、習得プロセスが異なる
- 2、語レベルでの長母音の習得は、文レベルでのそれに先行する
- 3、語レベルにおいて習得できていたとしても、文レベルにおいて習得できているとは限らない
- 4、語レベル・文レベルどちらの環境においても、母音の種類によって、習得の進み具合が異なる
- 5、語レベル・文レベルどちらの環境においても、母音の種類によって習得できたものと、できなかったものがあった
- 6、語レベルにおいて、長母音によっては、「逆行（後戻り）」が見られた
- 7、文レベルにおいて、長母音によっては、「化石化」が見られた
- 8、語レベルにおける習得プロセスは、以下の通りである。
「長母音の持続時間の過剰産出」→「習得している様子」→「部分的習得」
- 9、文レベルにおける習得プロセスは、以下の通りである。
「長母音の持続時間の短音化」→「長母音の持続時間の過剰産出」→「部分的習得」

第5章 考察

第5章では、RQ1およびRQ2の結果をふまえて、文レベルにおける長母音生成についてどのような発音学習支援が可能となるのか、考察を行った。

まず、RQ1の結果をふまえると、以下の2点の発音学習支援が可能となると考えられると明記した。

- 1、語レベル・文レベルそれぞれの環境での母音の時間制御の区別の意識化
- 2、/a, i, u, e, o/いずれの母音でもV1およびV2の関係に違いはないよう指導

次に、RQ2の結果をふまえると、以下の3点の発音学習支援が可能となると考えられると明記した。

- 1、時間制御のための「モデル音」提示や、文レベルという大きな単位での継続的学習
- 2、母音の種類に関係なく、V1・V2の音の「長さ」の関係に注目させる
- 3、初級からの発音学習支援の重要性の強調

第6章 結論

第6章では、調査結果、分析、考察をふまえ以下の3点に関して述べた。「文レベルにおける長母音の習得プロセス」、「発音学習支援への示唆」、「今後の課題」である。

まず、「文レベルにおける長母音の習得プロセス」は、以下の通りであると述べた。「長母音の持続時間の短音化」→「長母音の持続時間の過剰産出」→「部分的習得」。さらに、CSの中間言語を観察していく中で、以下の7点が明らかになったと明記した。まず、「1、語レベルと文レベルでは、習得プロセスが異なる」ということが明らかになった。さらに、「2、語レベルでの長母音の習得は、文レベルでのそれに先行する」が、「3、語レベルにおいて習得できていたとしても、文レベルにおいて習得できているとは限らない」ということが明らかになった。また、「4、語レベルにおいて、長母音によっては、『逆行（後戻り）』が見られ、「5、文レベルにおいて、長母音によっては、『化石化』が見られた」ことから、「6、語レベル・文レベルどちらの環境においても、母音の種類によって、習得の進み度合いが異なる」、さらに「7、語レベル・文レベルどちらの環境においても、母音の種類によって習得できたものと、できなかったものがあった」と明記した。

次に、「発音学習支援への示唆」は、以下の5点であると述べた。

- 1、語レベル・文レベルそれぞれの環境での母音の時間制御の区別の意識化
- 2、/a, i, u, e, o/いずれの母音でもV1およびV2の関係に違いはないよう指導
- 3、時間制御のための「モデル音」提示や、文レベルという大きな単位での継続的学習
- 4、母音の種類に関係なく、V1・V2の音の「長さ」の関係に注目させる
- 5、初級からの発音学習支援の重要性の強調

さいごに、本研究で明らかになった点をふまえ、「今後の課題」を以下のように明記した。本研究では、CSの中間言語の様相を観察、分析し、「文レベル」という音環境に着目をし、長母音の習得プロセスを明らかにしてきた。たとえば、文章、自然談話というさらに大きなレベルにおける習得プロセスを明らかにすることができれば、今後さらなる発音学習支援への貢献へつながると述べた。

参考文献

鮎澤孝子（1999）「中間言語研究—日本語学習者の音声—」『音声研究』第3巻 第3号 日

- 本音声学会、p. 5.
- 小熊利江 (2001) 「NNS の長音の産出に関する習得研究—長音位置による難易度と習得順序—」『日本語教育』第 109 号.
- 小熊利江 (2008) 『発話リズムと日本語教育』風間書房.
- 木下直子 (2010) 『韓国人日本語学習者の日本語リズム習得研究』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文.
- 戸田貴子編著 (2010) 「日本語音声の研究と教育における課題」『日本語教育と音声』くろしお出版、第 2 刷.
- 土屋千尋 (1992) 「モンゴル人学習者の日本語長母音習得の過程」『日本語の韻律に見られる母語の干渉 (3) -音響音声学的対照研究』文部省重点領域研究 平成 4 年度研究成果報告書、pp. 143-159.
- 室井幾世子 (1995) 「英語話者の日本語の特殊拍の知覚と産出に於ける諸問題」『SOPHIA LINGVISTICA』第 38 号、pp. 41-60.
- Nooteboom, S. (1997) *The prosody of speech : Melody and rhythm*. The Handbook of Phonetic Sciences. Blackwell.
- Toda, T. (1997) *Strategies for producing mora timing by non-native speakers of Japanese*, Acquisition of Japanese as a Second Language, Vol. 1, Bonjinsha, pp. 157-197.